

パートナーに対する暴力のメカニズム： Dark Triad と生活史戦略による個人差に対 するアプローチ

KIIRE, Satoru / 喜入, 暁

(発行年 / Year)

2018-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第417号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2018-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(心理学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014618>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	喜入 暁
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	第 644 号
学位授与の日付	2018 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 越智 啓太 副査 教授 藤田 哲也 副査（学外）広島大学准教授 杉浦 義典

パートナーに対する暴力のメカニズム
Dark Triad と生活史戦略による個人差に対するアプローチ

1. はじめに

喜入 暁氏提出学位請求論文「パートナーに対する暴力のメカニズム Dark Triad と生活史戦略による個人差に対するアプローチ」は、本研究の主要な論考を構成する実証的研究が、国際的に高く評価されている専門誌である「Personality and Individual Difference」に掲載されている。また、本論文に関連した研究成果は、国際心理学会、国際サイコパシー学会などの審査付きの国際学会で発表されており、また、国際的な専門誌への投稿準備中である。本学の「法政大学大学院紀要（人文科学・社会科学系）」にも研究の一部が掲載され公開されている。これらの各研究を、学位請求論文の目的にふさわしく全体としての統一性を構築し、論述の一貫性を確保するために加筆修正したのが本博士学位請求論文である。

2. 論文の構成

序章

第 1 章 IPV, Dark Triad, 生活史理論

第 1 節 パートナー間暴力 (IPV)

第 2 節 生活史理論 (life history theory)

第 3 節 Dark Triad

第 4 節 日本における Dark Triad と 5 因子性格モデルとの関連

第 5 節 第 1 章の総合考察

第 2 章 測定尺度

第 1 節 IPV の測定尺度

第 2 節	生活史戦略の測定尺度
第 3 節	第 2 章の総合考察
第 3 章 モデル検証	
第 1 節	モデル検証 1: 至近・究極要因からの IPV メカニズムへのアプローチ
第 2 節	モデル検証 2: IPV メカニズムのさらなる検証
第 3 節	第 3 章の総合考察
第 4 章 総括と展望	
第 1 節	知見のまとめ
第 2 節	限界点と今後の展望
第 3 節	ヒトの本質的理解へ向けて
第 4 節	まとめ

3. 本研究の目的

恋愛関係に於いて生ずる対人葛藤や、それに基づく暴力は、親密なパートナー間暴力 (intimate partner violence: IPV; ドメスティックバイオレンス, デーティングバイオレンスなどを含む) とよばれている。本研究はこの問題についてとりあげたものである。IPV に関する研究は現在までいくつもおこなわれてきているが、その多くが IPV の現状の把握を目的としたものであり、その発生メカニズムにまで踏み込んだ研究は多くない。また、それらの研究も、個々の IPV リスクファクターを明らかにするというものであり、それらを統合するアプローチがなされていない。本研究では、このような現状を鑑み、IPV の発生メカニズムについて、進化心理学的な観点をを用いて統合的なモデルを提案することが試みられている。

4. 各章の概要と評価

第 1 章では、本研究で論じる基本的な概念である IPV, Dark Triad についての先行研究を詳細にレビューし、本論文全体の目的が呈示されている。

まず、最初に IPV の現状とそのリスクとなる至近要因についての研究を概観し、他者に対するネガティブな感情、攻撃性や衝動性、反社会性、恋愛関係の不安定性、性関係の非制限性や、精神的・身体的な不健康さなどの要因が IPV と関連していることを示している。

次に、IPV を説明する枠組みとして進化心理学的な観点があることを示している。IPV はパートナー関係が崩壊する可能性が顕在化する場合に特に顕著であることから、IPV はパートナー関係を維持するための一種の進化的な方略であるという考え方である。ただし、この方略をとることは、逆に自身が社会的な排斥を受けたり、評判を落とすリスクも持っている。

そこで提案されたのが、このような状況に於いて、関係維持方略として IPV が選択されるかどうかについては、何かの個人特性が媒介しているのではないかという考え方である。

る。本研究では、この個人特性として、**Dark Triad** が提案されている。**Dark Triad** は社会的に望ましくない特性を備えるパーソナリティであるサイコパシー、ナルシシズム、マキヤベリアニズムの集合的概念である。冷淡さ、他者操作性、自己中心性をその核とする。

ところで、この **Dark Triad** の進化的基盤には、生活史戦略の個人差、とくに生活史理論における早い生活史戦略があると考えられている。それゆえ、**Dark Triad** の個人差や、パートナー関係維持行動として **IPV** を選択することの個人差の究極要因として、生活史戦略による説明が可能であるのではないかと考察され、これを明らかにすることを本研究の目的とすることが述べられている。

第 1 章については、先行研究のレビューと第 2 章以降に展開される実証研究の基盤となっているロジックの整理であるが、先行研究のレビューは極めて網羅的であり、論理展開も比較的明確である。ただし、そもそも進化心理学的なアプローチが今だ発展途上にあり、その研究ロジックが定まっていないというのも事実である。そのため、**Dark Triad** と生活史戦略の関連については理論的にさらに検討すべき問題が残っており、本論文のロジックも必ずしも精緻なものになっていない。しかし、進化心理学を導入する目的は明確に述べられており、現在のこの分野の研究水準から見て十分な水準には達していると考えられる。

第 2 章では、第 1 章で提案されたモデルを検証するため、その前提となる **IPV** や生活史戦略という概念の測定に関する研究がおこなわれている。

まず、**IPV** の測定についてである。わが国においては **IPV** の測定尺度が確立しておらず、特に、精神的暴力の多様性が測定されていないことが従来指摘されてきた。そのため、本研究では **IPV** の 7 形態（身体的暴力、間接的暴力、支配・監視、言語的暴力、性的暴力、経済的暴力、ストーキング）を測定する越智ら(2014)の尺度を改良した新尺度を作成した。また、この尺度とパーソナリティおよび行動指標との関連を示し、妥当性を検証した。さらに、高次因子分析により、**IPV** の各形態の高次概念として一般 **IPV** が仮定できることを示した。加えて、全項目の得点を用いた潜在ランク分析により、**IPV** のレベルを 3 ランクに分類可能であることを示した。

つぎに生活史戦略の指標である **K-factor** を測定する **Mini-K** の尺度について検討されている。この尺度は、因子構造に問題があることや一般サンプルを対象に、遅い生活史戦略を反映する変数のみが用いられており、早い生活史戦略を反映する変数が用いられていないことなどが問題点として指摘されている。本研究では、この尺度が、**K-factor** を単一の高次因子とし、5つの下位因子からなる尺度として構成できること、生活史戦略と関連があることが示されているパーソナリティ並びに行動指標との一定程度の関連があることを検証し、その結果、限界はあるもののこの尺度についてもある程度の妥当性があることが示されている。

第 2 章は本論文の中で使用される主要な 2 つの尺度について、その妥当性を検証した部分である。比較的高度な統計手法も使用しながら、2 つの尺度をより洗練されたものにして

いる。この部分では尺度は既成のものをもとにしており、その点のオリジナリティはないものの、それをそのまま使用するのではなく、自らの理論展開に適合するように改良を加えていたり、また、従来軽視されがちだった妥当性に関しても丁寧に検証しており、一定の水準は超えているものと思われる。

第3章は、本論文のなかでもっとも重要な部分である。第1章での理論的背景と第2章での測定ツールの作成に基づいて、実証研究がおこなわれている。

はじめに、Dark Triad と IPV との関連が検証されている。分析の結果、Dark Triad が IPV のリスクとなることが示唆され、特に、Dark Triad の内のサイコパシー傾向がこの関連に寄与していることが示された。一方で、マキャベリアニズム、ナルシズムは、サイコパシーを統制した場合には、IPV との関連はほとんど示されなかった。次に、Dark Triad と IPV の関連が、K-factor によって説明されるかどうかを検証されている。分析の結果、男性において、Dark Triad のうち、特にサイコパシーと IPV の関連は早い生活史戦略で説明されることが示された。サイコパシーは早い生活史戦略をとる代表的なパーソナリティであり、先行研究の知見を支持するとともに、早い生活史戦略が IPV のリスクとなることが明らかとなった。しかし一方で、女性においては、サイコパシーから IPV への正の直接効果のみが示され、生活史戦略によっては説明されなかった。これは、男女によって IPV の進化的機能が異なる可能性を示している。

第2に、K-factor、Dark Triad から IPV への効果はパートナー関係維持行動に媒介されるかどうかを検証されている。分析の結果、IPV はパートナー維持行動に媒介された Dark Triad の個人差に規定され、この関連の進化的基盤として K-factor が正の影響を示すことがわかった。

第3章では、IPV、Dark Triad、生活史戦略の関連について比較的高度な統計手法を用いて明らかにされている。この種の研究は現在まであまりおこなわれておらず、新しい観点からの研究としてオリジナリティが認められる。また、IPV の進化的基盤の男女差など今後の研究につながる新たな問題提示もおこなわれており、優れた成果だといえるであろう。

第4章では、第1～第3章までの研究がまとめられ、限界点と今後の展望について示されている。そして最後に、さまざまな人間行動について明らかにするための進化心理学的なアプローチの有効性について示されている。

本章の内容は実証的な研究成果というよりは、本研究の限界点と今後の研究への展望を述べた部分である。研究全体を進化心理学的なアプローチという理論枠組みによってまとめ、整合性のある論文としようと試みている。論理の展開などがやや理念的であるものの、研究を体系づけようと積極的に試みている点、自らの研究の問題点、具体的には性格特性と IPV の関連のみを分析し嫉妬などの一時的な感情要因について扱っていない点や、大学生の自己報告という限定されたデータから議論をしている点、男女差について示している

もののその具体的メカニズムについては明らかにしていない点などが自覚されており、今後の研究につなげようとしている点などが評価できる。

5. 本研究の総合評価

以下、本研究について法政大学大学院人文科学研究科心理学専攻における論文評価基準に従って、評価する。

(1) タイトルの適切さ

本研究タイトル「パートナーに対する暴力のメカニズム Dark Triad と生活史戦略による個人差に対するアプローチ」は、本研究の主要な構成概念の関係性を的確に表現するものとなっている。

(2) 問題の適切さ

本研究の対象である IPV は重要な社会的な問題であり、このメカニズムを明らかにしようとする試みは意義のあるものである。

(3) 研究方法の適切さ

本研究では、網羅的、体系的なレビュー、測定尺度の妥当性の検証、多変量解析を使用した概念間の相互関係の分析など、スタンダードな研究方法を丁寧に使用しており、研究方法としては適切性に関して、一定の水準に達していると思われる。この問題を進化心理学的な枠組みで理解しようと試みている点は、新しい試みであるが、ひとつのチャレンジとしてこれも、適切なアプローチであると考えられる。

(4) データ分析方法の適切さ

本研究では、最新の知見に基づいて、適切な分析手法を選択しており、想定されるモデルを検証するために、多くの類似した手法の中から最適な分析を選択している点で一定の水準に達していると思われる。

(5) 図表表現の完成度の高さ

本論文では、多くの図表が用いられているが、その基本的な形式、図表のいずれが効果的であるかの選択、作成された図表の意味するところの明瞭さの点で、十分な水準にあるものと評価できる。

(6) 考察における文献の検討と問題との対応

本研究では、各章・各節において取り上げた問題に対応した先行研究を概観し、得られた結果に対してそれらの先行研究の知見を踏まえた多面的な考察を行っている点で、問題と考察の対応がなされており、一貫性が見られる。

(7) 論文の独創性

従来の進化心理学的なアプローチに対して、個人差要因を巧みに取り入れた分析と考察をしておりその点は独創性が評価できる。また、従来の IPV 研究が現状把握にとどまっており、そのメカニズムについては掘り下げてこなかった中、この点についてのモデルの作

成を試みたこと自体がオリジナルなものとして評価できる。

(8) 全体構成の論理性，明快さ

本研究は，レビュー，尺度の構成，概念間の関連性の分析，理論的なまとめから構成されており，シンプルで明快な構成をしている。進化心理学という学問の性質上，若干の論理の乱れはみられるものの，現状では最善の論理性，明快さを持っている論文であると考えられる。

(9) 文章表現の明快さ，わかりやすさ，段落構成の適切さ

これらの点に関しても全体的に明快でわかりやすい文章構成がなされている。

(10) 誤字・脱字・表現の不統一

提出された申請論文に含まれる誤字・脱字・表現不統一は許容範囲にあると判断できるが，学位論文公開に向け，適宜修正を求める。

6. 結論

以上により審査小委員会は，喜入 暁氏提出学位請求論文「パートナーに対する暴力のメカニズム Dark Triad と生活史戦略による個人差に対するアプローチ」を博士論文審査基準に照らし合わせて，基準以上の業績であると評価し，喜入氏を博士（心理学）の学位を授与される資格を有するものであるとの結論に達した。

以 上